

この空がすき

曾我 貞子／作

久米 宏一／絵



著者紹介

曾我 貞子

1930年、新潟に生まれる。新潟高等女学校卒業。作品に、「ちいさいおばあさん」「ドンちゃんのおてつだい」「ドンちゃんゆうえんちへ」「一番星とかえる」などがある。

現住所 埼玉県桶川市朝日3-13-15

画家紹介

久米 宏一

1917年、東京に生まれる。豊島師範卒。児童出版美術家連盟理事。日本美術会会員。「車」同人。作品に、「山が泣いている」「やまんば」(小学館絵画賞受賞)「にげていったあの子」などがある。

現住所 東京都江戸川区南小岩町7-2-12

この空がすき

曾我 貞子 作

久米 宏一 絵



佑学社

もくじ

6	5	4	3	2	1
あの日のこと	代役	白いハトになって	かなしいゆめ	ふしぎな予感	主役にきまって
61	46	26	15	4	



12	11	10	9
春はそこまで ：	番くるわせ ：	新聞配達少年 ：	あたたかい昼食 ：
144	128	114	101



1 主役にきまって

笹原雪江は、はしって校門をでた。放課後の、演劇の
れんしゅうが、おわったばかりだった。

雪江は、息をはずませ、まあいい顔をはちきれそうに
していた。

駅前通りをすぎ、高崎線のふみきりをわたると、秩父
の山なみがみえた。その山の端に、夕日がしずみかけて
いる。十一月のすんだ空は、山かげをくつきりとかび
あがらせて、あかくもえていた。

線路ばたの道を、ちいさな町工場のところまでくると、
雪江は、ひよいと道をそれた。木材や、鉄骨が山積みになっ
ている、工場の材料置き場を、ななめによこぎり、
路地にぬけた。近道をしたのである。

雪江の家は、その路地のおくにあった。四けんならん
だ棟割りアパートの、いちばん東はしの家だ。

「ただいま」

ベニヤ板がそりかえった、げんかんのドアを、雪江は、いきおいよくあけた。ズックぐつをらんぼうにぬぐ。それから、すぐ左手のふすまを、ガタピシひきあけながら、声をはねあげた。

「お母ちゃん、ニュースニュース、ビッグニュースよ」

茶の間になっている六畳間の、こたつのところから、母がふりむいた。

「なんだろうね、まあ、そうぞうしい。六年生の女の子が」

パーマののびたかみ。おけしうっ気のない顔。母は、こたつにはいつて、ステレオセットの部品作りの内職ないしやくをしていた。

こたつのうえには、茶色のプラスチックの板と、こまかいねじのようなものが、一面にならんでいた。

母は、そのプラスチック板を手にとると、ピンセットでねじをつまみあげ、板のあなにさしこんで、ドライバーでとめた。

こたつのよこには、大きなダンボールばこが置いてあり、そこに、きょう、しあげ

た製品せいひんが、七分目ほどはいつていた。

「いいから、きいてよ、お母ちゃん」

雪江ゆきえは、せなかのランドセルを、たたみにずりおとすと、母のよこにぺたんとすわった。

「あたし、きょう、主役しやくにえらばれたのよ。ほら、こないだっからクラスでじゅんぴしてる、あのコンクールけきの劇げきの主役よ。ね、すごいでしょ」

「――」

「主役しやくやりたい子は、おおぜいたの。それでオーデイションオーディションやったら、あたしがきまったのよ。もう、うれしくって、天までのぼりそうだったわ。お母ちゃんにはやくおしえてやろうとおもって、あたし、はしってかえってきたのよ」

雪江は、なおも息をはずませた。

ここ、埼玉さいたま県川北市では、毎年三月に、市内の六つの小学校から、代表が参加して、演劇えんげきコンクールがおこなわれていた。

ことしは、そのコンクールに、雪江たち六年三組のクラスが、第一小学校の代表と

して、出場することになっていた。クラスでは、九月ごろからじゅんぴにかかり、シナリオ作りをしていた。その主役に、雪江ゆきえがえらばれたのである。

しかし、母は、内職ないしょくの手をうごかしながら、

「へえ、そう」

と、のんびりいったきりだった。

「あら、お母ちゃんたら、たったそれだけ」

「それだけって」

「もつと、なにかいつてよ。『雪江、それはたいしたものだね。お母ちゃんまで、鼻が高いよ』とか、なんとかさ」

「ま、あきれた」

母は顔をあげ、雪江を見てわらった。

「おまえは、おかしな子だねえ。そんなしばいのまねが、どうしていいんだろうねえ」

「あら、お母ちゃんたら、しばいのまねじゃないわ。あたしたちがやってるのは、演

劇よ。演劇えんげきって、とってもいいことなのよ。お父ちゃんが、そういったわ」

「おや、お父ちゃんが、なんて——」

「あたしがね、こないだ、シナリオ作ってるっていったらね、『雪江、演劇は、きっといいなかができるから、がんばってやってごらん』って。そうしてね『みんなが力をあわせたり、心をひとつにして、なにかやるってのは、とってもだいじなことなんだよ。きつと、いいものができるよ』って、そういつてくれたのよ。えへん、えへん」

雪江は、あごをひき、かたをいからせて、父の声色こわいろをまねした。

母は、ふきだしてわらい、

「お母ちゃんには、よくわからないけど、しっかりおやり」

と、はげましてくれる。

「ええ、きつと優勝ゆうしょうするからね」

雪江は、晴れがましさと、うれしきのいりまじった顔をあげた。その顔が、ふとくもった。一彦かずひこをおもいうかべたのだ。



一彦は、クラスのだれとも口をきかない、お客さまのような子だった。いつも垢^{あか}じみたセーターに、えりまでかかるかみの毛を、もじやもじやにしていた。

こんどの劇^{げき}でも、一彦は、はじめどの役もなかった。大道具、照明、効果^{こうか}などどの係にも、じぶんからなろうとしない。

しかたなく先生が、舞台^{ぶたい}の右から左へあるくだけの役をわりあてた。一彦は、しかし、とくべつうれしそうな顔も、かなしそうな顔もしなかった。無表情^{むひょうじょう}にだまっていた。

（一彦くんたら、ぜんぜんやる気がないんだわ）

雪江^{ゆきえ}は、せっかくのコンクルの劇も、一彦をおもいだすと、ゆううつになった。失敗しそうな気がしてならないのだ。

しかし雪江は、すぐにもちまへの明るさをとりもどす。

（あたしがしつかりやれば、きつとだいじょうぶ。大成功にしてみせるわ）

雪江は、じぶんがテレビドラマの主人公になったよりも、もっととくいな、しあわせな気持ちになった。

すらりと立ちあがると、

ラッタッター ラッタッター

あたしは、すてきなヒロインよ

せまいこたつのまわりを、足をはねあげ、手をよこにふって、おどつてまわった。
げんかんのドアがあいた。

「はら、へったあ」

弟のひろしが、遊びからかえってきたのだ。

ふすまをあけて、茶の間にはいつてきた四年生のひろしは、セーターにジーンズ。
くるくると、よくうごく目をしていた。

「はら、へったよう。おなかとせなかと、くつつきそうだあ」

ひろしは、へやのすみの戸だから、せんべいを四、五まいつかみだすと、むねにかかえた。一まいを、パリンと前歯でかみながら、テレビのスイッチをいれる。

雪江は、そのひろしにも、いわずにいられない。

「ひろし、おねえちゃんね、きょうコンクールの劇の、主役にえらばれたのよ。どう、

すごいでしょ。がんばるから、見に来てね」

「ひゃあ、ほんと」

こたつに足をいれかけたまま、ひろしは、ぱちぱちと音がするほど、まばたきをした。

「おねえちゃん、すごい」

しかし、すぐに、ふにやふにやとへんなわらいをうかべた。

「でも、だいじょうぶかなあ、おねえちゃん。そんなたいへんな主役になって」

「だいじょうぶかって、なにがよ」

「だってさ、おねえちゃん、おっちょこちよいだろ。だから、本番でせりふわすれりして、失敗するんじゃないかとおもってさ」

「まあ、にくらしい」

「ほんとだよ。したらおねえちゃん、赤っぱじかくよ。学校の友だちにあわせる顔、なくなるってもんさ」

「いったわね、よくも」

雪江^{ゆきえ}は、右手でこぶしを作つて、ふりあげる。

ひろしは、雪江のげんこつをたくみにかわして、ぱっと、へやのなかをにげた。戸だなのまえで、こつちをふりむくと、さもおかしそうにわらつた。

「あははは、おれ、おねえちゃんのこと、心配してやってんだよう——ぶてるもんなら、ぶつてごらんよ」

ボクシングの形に身がまえる。

「ようし、いくわよ」

雪江も立ちあがつて、それにむかつていく。

ドシン、ボタン！ ふたりは、こたつのまわりで、ボクシングごっこをはじめた。

「やめとくれ、ふたりとも」

母がひめいをあげた。

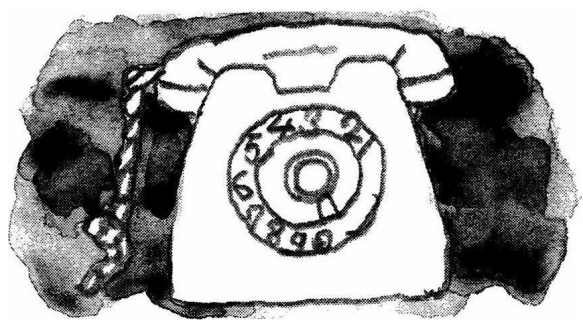
「こんなせまいところで、そんなことされたらたまらないよ」

母はこたつのうえのねじくぎを、ひっしで両手でかばっている。

「おまえたちって、どうしてそうなんだろうねえ。顔あわせると、すぐこれなんだか

ら。なががいいのやら、わるいのやら」

雪江^{ゆきえ}とひろしは、ボクシングごっこをやめて、かたをすくめてわらった。



2 ふしぎな予感

そのとき、へやのすみの台のうえで、リーンと、電話のベルが鳴った。

「はい、もしもし」

雪江がかけよって、受話器をとる。

「雪江か」

父の声だった。

「あ、お父ちゃん」

毎日あつてゐる父なのに、雪江はなぜか、なつかしい気がした。

「どうしたの、なにか用？」

「いま、工場から電話してゐるんだがな。きゆうに残業することになったんだ。こんやはおそくなるからって、お母ちゃんにそういつてくれないか」

「ええ、わかったわ。それだけ？」